



2022 11月園だより

認定こども園 下関短期大学付属第二幼稚園
山口県下関市彦島塩浜町2丁目2-21 ☎ 083(266)5821

心の栄養満点～ようこそ絵本の世界へ～

先日、図書主任が保護者の皆様から「おすすめの絵本」を募集したところ、古今東西の様々な絵本情報が集まりました。ご協力ありがとうございました。絵本に対する皆様のご造詣の深さを改めて感じさせていただきました。



以前、ある新聞の読者欄に、「子どもが絵本の中央に人差し指を乗せ、スクロールしてページをめくろうとしていた」という投稿がありました。今の時代を象徴しているような光景ですね。

さて、「絵本は心の栄養」とよく言われます。では、どのような栄養素があるのでしょうか。

- 1 子どもの心の安定が図られます。子どもは同じ絵本を何度も読んでくれとせがんできます。なぜでしょう。おそらく、そのお話の展開のおもしろさやスリル、言葉の心地よさを楽しんでいるのかもしれない。分かっているから安心して聞けるという子もいます。そして、お母さん（お父さん）と二人きりの時間を求めているのでしょうか。下の弟や妹が寝た後など、やっと独り占めできる至福の時が来るわけです。親と一緒にいるだけで心は満たされるものです。
- 2 現実では経験できない感情を経験できるのが、本の世界です。子どもは、現実の世界とお話の世界を自由に行き来することができる世界に生きています。「ねないこだれだ」、「さんまいのおふだ」、など、ちょっと怖いお話には何度読んでやっても怖がります。でもまた読んでくれとせがみます。なぜか。親がそばにいて安心できるからです。また、「三びきのやぎのらがらどん」や「ぱんどろぼう」など、スリルも伴いながら話の展開がわかりやすく痛快な絵本は、面白さ2倍。絵本を通して親子で共感し、豊かな感情が育まれます。
- 3 絵本の楽しみ方の一つに挿絵があります。年齢が低いほど、シンプルで必要最小限の挿絵が子どもに受け入れられやすいそうです。先月亡くなられた山脇百合子氏が描かれた「ぐりとぐら」などは、とらえる対象が明確で、大変親しみやすい挿絵です。一方、中には、「おおきなかぶ」の挿絵を描いた佐藤忠良氏や「ふしぎな絵」の安野光雅氏（島根県津和野町出身）のような世界的な画家が描いているものもあります。幼児期はあらゆる感性を育む時期です。ですから、幼児期から本物の芸術に出会うことはとても大切です。絵を見る目が格段肥えてきます。
- 4 絵本の読み聞かせによって言葉を豊かにすることができます。幼児期は、耳から母国語の美しい表現を聞くことが大切です。「てぶくろをかいに」、「花さき山」など、標準語、方言を問わず、子どもたちは絵本の文章を耳で聞いて楽しめます。「どろんこハリー」では、「くろいぶちのあるしろいいぬなのに、しろいぶちのある くろいいぬ」といった表現も3歳前から理解し、その表現の面白さを聞きながら体感します。絵本で様々な言葉を体験することで、実感を伴いながら言葉が豊かになっていきます。
- 5 心に伴って脳も発達します。「クシュラの奇跡～140冊の絵本との日々～」（ドロシー・バトラー著）では、視覚、知的障害、低緊張と何重ものハンディをもって生まれた女の子クシュラに、生後わずか4か月から両親が強い決意で毎日絵本の読み聞かせを行うことにより、絵や言葉に関心をもち始め、やがて他者とコミュニケーションを楽しむまでに成長した記録が綴られています。障害のあるなしにかかわらず、絵本は子どもの脳を刺激し、知的好奇心を高めるとともに、世界観を広げるということの証しです。

このように絵本は栄養満点です。読書の秋。秋の夜長は虫の声を聞きながら、絵本の世界へお子様をいざなってあげてください。さて、今夜は何を読んであげましょう？（園長 寺本 明生）